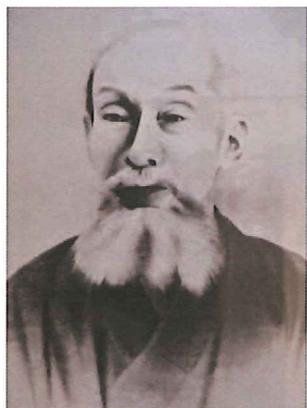


## 4. 羽生慎翁と生花

RESIDENCE  GESSOU TEI



羽生慎翁道則大人

種子島の花道は、羽生慎翁の祖父道潔が寛政4年(1792)鹿児島の花道池之坊流師範丸田氏に入門し、種子島の花道師範家となったことに始まる。孫の慎翁(1826～1901)は、幼少より道潔について読書・手習いを修業し、弓術・槍術、示現流剣術、故実礼法、池之坊花道など文武両道を極めた。

### 【羽生慎翁の足跡】

- ◆明治8年(1875)、家元42世専正師より生花伝法皆立伝花数ヶ條の伝授を受け、号を梅陰亭月窓と称す。その後、大日本花道家元京都六角堂池坊の門弟となる。
- ◆明治12年(1879)、薩摩・大隅両国会頭職就任。
- ◆明治15年(1882)、大日本総会頭職(宗匠代理、東京出張所所長)就任。その後、久邇宮の花道御用、また島津公爵家や大徳寺の花道教授となり、池之坊正派を全国に広めた。これらの功績を讃え、東京高輪泉岳寺境内に公德碑が建てられた。

種子島でも江戸時代以降、池之坊花道が盛んになり、屋敷周辺にはハラン(花材)が植えられ、婦人たちが修業した。これもひとえに羽生慎翁の影響が大きい。

## 5. 第28代 種子島時望男爵と種子島文化



(1907～1954)  
28代 時望男爵  
フロックコートで宮中  
参内し男爵を賜った折

28代種子島時望公(1907～1954)はこの屋敷で生まれ育った。早稲田大学史学科在学中、父守時公の跡を継ぎ爵位を賜る。

宮内省図書寮勤務。戦後家族と共に種子島に帰り、この屋敷に住む。47歳で亡くなるまで種子島の土、種子島の人達と共に生き東奔西走した生涯を送った。特に郷土の産業振興に憂いを感じ、黒糖生産開発に力を注いだ。さらに、ポルトガルの児童に種子島の児童の絵を送るなど、ポルトガルとの親善友好に尽くされ、これが種子島日ポ交流の端緒となった。種子島家700年の歴史を書き綴った『種子島家譜』の保存と一般公開に踏み切る。

『種子島家譜』は、民政に治績をあげた歴代島主の記録、鉄砲伝来はじめ種子島を中心にし鹿児島、大阪、京都との関係、政治、経済、社会の動きが年月を追って記録されている「歴史の宝庫」である。

1950年 種子島の同志が相寄り、文化・文学運動を企画し『熊毛文学』と命名、初代会長に推挙される。その発刊の辞に時望公は、「熊毛文学が生まれたことを共に喜びたい…爐(いろり)であぐらをかいて茶を汲みかわし、共に楽しみ、

共に考え、その中から傑出した作品が生まれるに違いない」と記す。この屋敷は、時望公が中央の著名人らをもてなし、種子島の青少年達を励ました「お屋敷」でもあった。



種子島家譜(県指定文化財)  
(種子島家蔵)

## 6. 赤尾木城と種子島の武家文化

種子島氏の居城は島主の時代によって移動している。赤尾木城が、登場するのは、17代忠時から。寛永元年(1624)忠時12歳の時、内城(今の榕城中)から、上の城(今の榕城小)へ。亜熱帯特有のアコウが繁茂していたことから赤尾木城と呼ばれ、明治2年(1869)の版籍奉還まで約250年間、種子島の政治・文化の中心となった。島津氏の鶴丸城と同じく、天守閣の無い屋形づくりの平屋で「城をもって守りとせず、人をもって守りとなす」の精神で造られた。この城は山鹿流によるといわれている。種子島の統治機構は薩摩の外城制度に準じ、居城を麓土が直接守り、農村部には郷土を配置し、つねに大名を外側から守るという体制を作っていた。赤尾木が麓で、麓土は約300人、残る700人程度が郷土として各村に散在していた。種子島は薩

摩藩の一外城で種子島も一つの郷であり、その郷の中に18カ村が置かれていた。



旧赤尾木城城門(現:榕城小学校)

■お問い合わせ

赤尾木城文化伝承館 **月窓亭**

〒891-3101  
鹿児島県西之表市西之表 7528  
TEL 0997-22-2101  
MAIL gessoutei@clock.ocn.ne.jp

